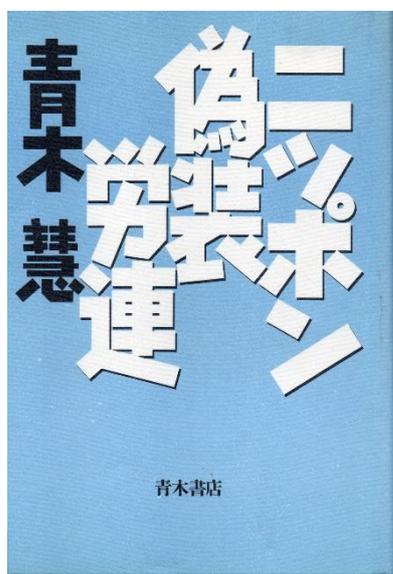


## 総評・全国金属はなぜ変わっていったのか

—青木慧著『ニッポン偽装労連』（1989年、青木書店）



### たたかう労働組合つぶし 「民主化運動」

大企業偽装労組や秘密労務組織の「大企業労働組合の諸君」は、産業別や全国的な組織に結集し、「民主化運動」と称して、宮田松下政経塾塾長がいう「共産党と左派を排除するという運動」を展開していった。宮田塾長が金属労協（IMF・JC）議長だったころから、女房役の事務局長だった瀬戸一郎副議長は、事務局長当時の八二年に、私のインタビュー（『日本式経営の現場』）に答えて話している。

「全造船なんていま七〇〇〇人くらいのちっちゃな組織になってますけどね、昔は大いばりの組合だったんです。七万人くらいいて主力が三菱と石播とでね。それで同盟グループの造船というのは、三万人くらいしかいなかった。それで全造船へ何回も行ってね、当時、委員長やってた柳沢錬造〔現民社党参院議員〕に会って、IMFに入るべきだと話をしてね」

「JCをつくる段階では結局だめだった。それで同盟系の造船三万人がJCに入ってきた。これはいまJC顧問の古賀専さんがね、右の方の中心でね。彼が引き連れてきた。それでJCとしても形をなしたわけですけどね。それによって、うちの方は、JCへ入ってこないところをとことん攻撃してですね、つぶしたわけですからね、それで全造船つぶれちゃったわけ

ね」

石播重工の労働組合を偽装労組化し全造船を脱退させた中心人物は、世界民主研究所に出入りしていた鍋山貞親の弟子たちだった。いっしょに出入りしていた堅山連合会長も第三章で話していた、金杉秀信、市川健三、荒川和雄といったメンバーだった。彼らは、鍋山青年団の独青にも加わり、石播重工の秘密労務組織である石川島民連の中心メンバーであり、全造船内の二八会の中心でもあった。

なかでも、金杉は秘密労務組織の全国組織、全国民連の代表幹事（会長）をつとめたこともあった。全造船を脱退すると同盟加盟の造船重機労連を結成して委員長となり、同盟の副会長や全民労協副議長などをつとめた。中曽根政権のもとでは、宮田塾長とともに臨教審の委員に登用された。

全造船の場合は、二八会の秘密労務組織が石播重工などの大企業労組を偽装労組化すると脱退したが、鉄鋼労連の場合は、鉄鋼連絡会議に属する各社の秘密組織が各社で偽装労組化に成功しても脱退しないで、鉄鋼労連全体を牛耳り偽装労組化した。中小の関連企業の労働組合も、鉄鋼労連と鉄鋼連絡会議が会社側と連携して偽装労組化していった。

鉄鋼労連加盟組合のなかで「鉄の最左派」といわれた日本ステンレスの組合は、中小組合の中心になっていた。だが、八葉会という秘密労務組織が組織され、定石どおりに偽装労組化されていった。旧執行部の幹部たちは社会党員だったが、解雇された。八葉会は、会社まるがかえで育成されたが、同時に鉄鋼労連と鉄鋼連絡会議に指導されていた。

このようにして、総評加盟の民間単産は、大企業偽装労組や秘密労務組織の「大企業労働組合の諸君」につぎつぎと牛耳られていった。総評の民間単産のなかで、自他ともに「たたく左翼と認めていた全国金属も、総評が「労働戦線統一」の路線をとっていくとともに、連合加盟の路線に転換させられていった。第二章で登場した、佐竹全金委員長のもとで筆頭副委員長をつとめていた中里忠仁金属情報機器労組委員長に、その経緯を聞いた。

—どういう状況のなかで、総評ばかりか全金までが路線を転換させられていったのですか—

総評は、七単産ではじまった春闘方式も一〇〇単産を超える巨大な力になっていった。その経過のなかで、総評を弱めようとする勢力が、絶えず裏側で働いていたわけですよ。総評は、同盟と違って、安保闘争をやるとか、反動立法に対する闘争とか、少なくともたたかう路線をとってましたから。

金属労協の提唱によって、政策推進労組会議とか賃金闘争連絡会議とか、総評を外側から崩す包囲網というのが、約二〇年間かかってつくられてきたと、私は見ているんですよね。その中心に座ったのが、鉄鋼労連の宮田義二さんであるし、その弟子の中村卓彦とかでね。あるいは、自動車関係では塩路一郎とかね。とくに自動車労連（日産労連）の塩路は、全金のプリンスを全金から脱退させるんですがね。全金もその当時は、歴代の立派な指導者がいましたから、とくに権利闘争とか合理化闘争というのを、非常に熱心にまじめにやってきた単産ですから。それを弱めようという勢力が、背景ではかなり鋭かったですよ。

ですから、総評は、官公労が主体であったとしても、少なくとも大衆闘争を背景にした権利闘争、平和闘争など、たたかう労働戦線のナショナル・センターとして、独占資本の側、政府・自民党の目の上のコブであったことは、間違いないわね。ですから、鉄鋼労連を軸として、自動車、造船、電機というような基幹四大産業といわれた、日本の中枢の産業を握る。それぞれの労働組合、とくに大企業ですね、新日鉄とか石播、日産とか、松下とか、そういう大独占の労働組合の幹部によって、総評に焦点、照準を合わせながら、まずなんといっても、春闘を弱めるということですよ。大衆闘争を弱めるということですよ。

七八年ごろからね、それが急速に強まってきたと思うんです。ぼくらが全金の副委員長に入ったころ、向こうのJC関係からいろいろな誘いがありました。しかし、そのころは、全金としては、JCに対する一つの異和感を持ってましたからね。不信感を。

—どこに誘いがかかってきたんですか—

全金の中央に誘いがかかってきたのが、七八年ごろですよ。総評系であれば鉄鋼労連ですよ。総評の大手単産で、まだJCのリーダー・シップを取っていたわけですから。全金というのは、自動車にも関係する。いろいろな部品メーカーが、傘下にたくさんありますから。電機関係も、強電、弱電を問わず、電機部門に関する業種というのは非常に多い。造船にかかわる造船補機部門がかなりありますし、中型造船もあります。鉄鋼の製鋼、鑄造関係も、全金にありました。

全金には、大企業ではありませんけど、中小の鉄鋼も電機も自動車も造船もあるということですから、業種的にはJCとつながりが深い単産ですよ。他方、同盟の方も金属同盟というのがあって、同じような業種を持っているわけです。しかし、同盟の方にあまりアタックしないで、総評・全金の方に焦点を当てて、七八年ごろからいろいろと介入というか誘いをかけてきた。

それは最初、全金の中央本部というよりは、大手支部ですね。シチズン時計とかセイコー、横河電機とか山武ハネウエル、東京計器とか、中京地区の豊田自動織機とかね。全金の大手支部と目される、かかわりの深いところを、幹部をとおしてね、JCとの結び付きが急速に強まってきたんです。

われわれも警戒はしておったんですが、七九年、八〇年とおよぶにしたがって、例の六人委員会〔統一推進会〕ができるころには、もう全金もかなり深入りしてたんですね。佐竹委員長が警戒しておって、残念ながら七九年秋に亡くなって、委員長が高山勘治氏に代わったわけですよ。佐竹氏が急逝されたことが大きなきっかけとなって、総評そのものも民間単産から崩されていっている。

それで、七八年から八〇年にかけて、各単産とも世代が代わって新しい幹部によって三役の半分くらいが若返ってくる。執行委員も代わってくる。そういうことが出たときに、比較的そこにとびつき安い条件が、組織的にあったと思うんですね。とくに大手支部の委員長とか書記長の三役クラスが、戦前の苦しい残酷な政治の体験のない人たちが、執行部を握る。労働組合を握るという状況になりましたから。

そして、七四年春闘を境に、春闘もだんだん低下して、とくに八〇年前後になりますと、JC の力が大きくなって春闘も思うようにならない。頭打ちになったわけですね。そういうこととからめて、ストライキをいくらやってもだめだと。資本の側はストライキをやらせまいとして、組合を分裂させ活動家と目される幹部を容赦なく首切ってみたり、強制配転を試してみたり、そういうことをやりましたから。

そういう大組織の幹部というのは、たたかうだけでは組織を守れないと。これは労使の対立とか対決でなくて、協調してやっていくべきだという思想が、だんだんと JC の影響が強まるにしたがって、全金の中枢部が、そうやってきた。それが、全金という一つの単産が、だんだん右傾化する、当初の一つの特徴だね。比較的階級的であり、権利闘争を大事にしてきた単産がなぜ右傾化してきたのか、だいたいそういう経過ですよ。

実際に、いろんなシナリオを書いた人はいるだろうと思うんだけど、要するに「基本構想」を起草した六人だけの問題じゃないと思いますね。総評を弱める、できれば解散に追い込むというのが、そりゃあ独占資本、自民党、権力側としては、のどから手が出るほどほしかったに違いないし。

ですから、背景にあって、大単産、大企業の指導者たちが、それらの権力者、とくに独占資本の頂点に立つような財界のトップ・リーダー、自民党、政界のトップ・リーダーあたりとの連携によってですね、育成されて、息長く狙いを定めて、総評を今日まで追い込んできた、というのが背景じゃないでしょうかね。

—全金のなかの大手支部から、どんなふうに変わっていったんですか—

七八年ころから全金と JC との関係が深まっていったというのは、社会党の党籍をもつ大手支部委員長あたりが、JC のトリコになったからです。たとえば、全金の中央の三役段階で一つの方針を決めますね。来年なら来年の方針を。それに対して、それまでは波風がたたなかったのが、それらの大手支部委員長あたりから、原案に対して修正を求めるようなことが出てくるわけですよ。

たたかひの内容を、文言上で非常に歪めてみたり、ストライキという文言をできるだけ削ってみたり、「統一闘争」という表現を削ってみたりね。資本や権力に対するたたかひ方、それについての行動も弱める修正を求めるわけですね。それは JC 路線に間違いなし、同盟方針にも近いやつなんですね。

そういうのが、平気で組織だって出てくるわけです。東京地本の大手支部委員長あたりが中心になって、中央本部に方針の修正を要求するようになったのです。そういう圧力をかけて方針を変えさせようとしたけども、当時の佐竹委員長もわれわれも、それには応じなかったわけですけど、そういう力が全金をじょじょに蝕んでいったということですね。

—そういう人たちには、共通した傾向がありましたか—

結局、全金のなかにある社会党の党員協議会が大会の第一日目の夜には、決まって開催される。そこで、方針上の修正や人事問題について決めていくわけです。また、外部との連携は、鉄鋼、造船、自動車、電機のそれぞれの単産のなかには、中心となる大組織があるわけ

ですから。鉄鋼なら新日鉄とか、自動車なら日産とか、単産じゃなくて、一つの企業内の労働組合の委員長クラスとの付き合いがひろがるわけですよ。

そういうなかで、労使が一体となるべきだとか。労使がたたかいをやっているだけではだめとか、そういう思想というのが、付き合いのなかでだんだん培われて、おれらと一緒にやるなら、一つ全金の姿勢を変えてくれと、こうなるわけでしょう。

全金のたたかいであれば、大手の組合というのは、組合数からすれば非常に少ないわけですから。いまでも支部・分会というのが一一五〇くらいあるんじゃないですか。そのうち八〇%ぐらいが中小支部なんですね。五〇〇人以下なんです。五〇〇人以上というのは、たかだか二〇%程度なんです。そのなかでも大手支部といわれるのは、ほんの指折り数えるしかない。五%足らずですよ。大きいと云って、最大のところでせいぜい七〇〇〇から八〇〇〇人ですよ。

どうしても中小が圧倒的に多く、末端では争議が多いわけですよ。これは、資本のスクラップ・アンド・ビルドによって、関連の企業なんてすぐにもつぶされますからね。だから、どうしても合理化に対する反対闘争、権利闘争というのが多くなるわけですよ。

大手支部とすれば、組合員数が多いから、カネをうんと収めるわけですよ。組合員が多いんだから当たり前だと思っただけでも、それで争議やるのは中小零細だと。そういうところにどんどんカネが使われると。それで、おれの方は、大手対策というのはほとんどやらずに、中小対策やると。大手はカネと中小に対する動員で出されると。ヒトもカネも出さされ、結局、なんのメリットもないと、要するにメリット論が出てくるわけですよ。

全金の場合も、「大企業労働組合の諸君」とはいえないまでも、企業の「競争原理」並みの大手支部の「メリット」にゆすられ、路線を転換していったのである。連合に加盟した労働組合のすべてが、「大企業労働組合の諸君」のような偽装労組というわけではない。「大企業労働組合の諸君」に引っ張られ、追随していった組合が少なくないからである。労務屋の失礼な言葉を借用すれば、◎印の「大企業労働組合の諸君」や○印の労働組合だけでなく、「ぞろぞろ部隊」の□印や△印さえも、追随させられたからである。岩井元総評事務局長は、今日の連合の勢力をつぎのように分析する。

—総評が解散を決め、連合に吸収されていこうとしている事態をどう見ておられますか—

連合というのは三つの勢力、流れなんですね。一つは、宇佐美君が〔八五年二月の建国記念日式典で〕「天皇陛下万歳」の音頭を取った、そういうのを持っていますね。そのつぎにJC〔金属労協〕という流れです。これはむろん反共なんです、もっと本質的にいうと、会社本位ということですね。企業本位。それからもう一つが、総評から行った私鉄ですね。こらまだいくらか戦闘性を持っている。

私鉄は中小が割合に多いんですね。したがって労働条件がうんと悪いんですよ。ですから、

そう簡単に同盟の幹部やJCの幹部のというような姿勢はとれません。いまの話のように、ストライキで自分自身の賃金を自分で上げていく。ずうっとやってきとるでしょう。これを変えるのはなかなか容易じゃないですよ。理屈で教えられたんじゃないから。私はしばらく、この鼎立の状態がつづくと思いますね。

札付きの労務屋の「大企業労働組合の諸君」は、大企業偽装労阻の幹部として、系列企業や産業別の労働組合を牛耳ると、第二章でみたように、いよいよ総評・官公労に対して「労働戦線統一」攻略で挑んだわけである。総評執行部は、札付きの労務屋たちは「話せばわかってくれる」と、小料理屋での密談などで、「労働戦線統一」にすがっていったのである。

その過程は、小細工ばかりを先行させて、肝心の労働者を（主体）にした（自主）的な論議を経ないまま、「またぎきにされる」などと、私の「参加」した労務屋の秘密労務研修会で講師の労務屋がいったように、「大勢順応型」の「ぞろぞろ部隊」を、とりあえずは連合に結集させたわけである。

だが、講師の労務屋がもう一つ強調したことは、◎印の「健全な組合員」も、「健全な組合」も、「ほっといたら、健全でなくなる」ということだった。今後は、連合の政治的意図に従って、取り込んだ労働組合を○印から◎印へ、□印を○印へというように、内部工作もはじまっていくことだろう。

◎印の「大企業労働組合の諸君」は、札付きの労務屋か企業側に丸がかえで養成された労務要員であり、大企業と財界の別動隊として「日本の労働運動を牛耳る」ことをめざしてきたのである。彼らが系列・関連企業の労働組合や産業別労働組合組織を制圧する過程も、とても労働組合とはいいがたい戦略や手段を用いてきた。

だが、総評執行部は、彼らに追随しただけではなく、総評がたたかって築いてきた遺産をも御破算にして、「大企業労働組合の諸君」がたどってきた道を、追いつけ追い越せとばかりに、駆け足で追いかけていった。短期間に急転換した路線には、重要な問題が含まれており、次章で明らかにしていく。